

はばか
憚りもなく
‘はばかり’談

[企業史コラム6]
もうひとつの化粧史
—伊勢半グループ製品の今昔—

[かわら版]
講座のご案内
新商品のご案内

「江戸名所道外尽 二十八 妻恋こみ坂の景」歌川広景 画・
国立国会図書館所蔵
こみ坂途中の公衆トイレで用を足す待と、
その臭いに思わず鼻を覆う従者と飛脚。



はばか
憚りもなく‘はばかり’談

世界に誇る
ニッポンのトイレ文化

昨年、政府がまとめた成長戦略に「トイレに関する取り組み」が盛り込まれた。日本のハイテクトイレは、世界に注目され「おもてなし」文化はトイレにまで浸透しているという。温かい便座に、自動開閉、温水洗浄、プライバシー音消音装置まで高機能かつ快適さの追求はとどまる所を知らない。いわば、トイレ大国となった日本だが、今日のハイテクトイレを手に入れるまでには、先人たちの並々ならぬ開発の歴史がある。では、生きているかぎり絶対にお世話になるトイレの歴史を振り返ってみよう。

**人に歴史あり、
トイレにも歴史あり**

古くは縄文時代の貝塚から人間の排泄行為に関する遺構・遺物が検出される。福井県鳥浜貝塚は、縄文時代草創期から前期（約一万二千～五千年前）

の遺跡で、この遺跡から川に板を張り出した設備と周囲から糞石が出土した。この設備の発見によって、縄文時代は排泄物を川に流していたということが分かる。

鳥浜貝塚は、低湿地の遺跡であるため腐食して残りづらいような漆製品や木製品なども良好な状態で発見された考古学的にも重要な遺跡である。そのようなわけで糞石も発掘できたのだが、この糞石を分析することで食事内容・調理法・糞をした季節・健康・衛生状態といった貴重な情報を得ることもできる。

奈良時代になると川に流すことは変わらないが、川を建物内に引き込み用を足すようになる。ちなみに、今でもトイレのことを「厠」というが、語源は川の上に板を渡して排泄物を流していた施設を「川屋」といつていたことに因る。

平安時代に入ると画期

的なトイレが登場する。持ち運び可能な「樋笥」という木製のおまるである。一生のうちほとんど出歩くことのなかった貴族の姫君にとっては、丈の長い着物を着て厠に行くよりも、トイレを移動させた方がよっぽど早く用が足せたであろう。樋笥は誕生するべくして誕生したのである。樋笥は、樋殿と呼ばれる一畳程度に区切った空間に設置されており、溜まった排泄物は樋洗という仕事の者が川に捨てに行った。個室といえども御簾や几帳で仕切っただけなので、実は平安時代の貴族の屋敷は臭かつたらしい。

鎌倉時代に汲取り式トイレが登場し、江戸時代も基本的には汲取り式であった。江戸のトイレは、当然だが一家に一基トイレがある時代ではないので、長屋の間に共同トイレが設けられていた。

『御府内沿革図書』な

どの江戸の絵図には町屋一軒ごとの詳細は記載されないため、ここから町屋の土地利用を知ることができない。そこで、明治六年（一八七三）の『沽券図』を見ると、長屋の数軒に一箇所の間隔で町会所と記載されている場所がある。この間隔は、地域の人口比率によって差があるが、おそらく、町会所は江戸期から町の寄合所であると共に、共同トイレが設けられていた場所だと思われる。

排泄物でひと儲け!?

人の糞尿を下肥(肥料)として使い始めたのがいつからなのか詳しいことは分かっていないが、福井県一乗谷朝倉氏遺跡や妙楽寺遺跡などから大形の枳形汲取り式トイレが出土することから戦国時代には確実に利用されていたようである。

そして江戸時代、糞尿の下肥としての利用価値

はますます高まる。農家にとって大切な肥料である糞尿は、お金や野菜を払っても汲取りたいものだった。江戸中期になると、「下肥買」という専門の汲取り人が現れ、農家に売るようになる。長屋では、借家人(店子)の排泄物は大家に所有権があり、排泄物の引き取り代は大家の臨時収入となった。しかも、この糞尿代、大家にとつてかなり高収入だったやうで、年の暮れにはこの金で借家人に餅が配られたという。ちなみに、排泄物にはランクがあり、食生活が豊かで栄養価の高い大名や豪商の屋敷から出る排泄物は値段が高く、貧乏武士や長屋の住人の排泄物は安かつたらしい。

江戸はご存知のとおりリサイクル都市として有名で、浅草紙といわれる再生紙をトイレットペーパーなどに利用していたりするが、まさか人の糞尿

までリサイクルしお金に変えていたとは、エコというよりその商魂たくましさで敬服してしまおう。

基本は二戸連続

喜田川守貞著『守貞漫稿』(安政元年・一八五四)には「長屋と號て一字数戸の小民の借家には毎戸に厠を造らず一二戸を造て数戸の兼用とする也」と書かれてあり、京阪と江戸の厠の絵図がそれぞれ載っている。京阪と江戸では建物の構造が違うやうだが、この絵図はどちらも二戸続きの厠を描いている。また、今号の表紙の浮世絵もよく見ると、二戸以上続く公衆トイレであるので、トイレは二連棟がスタンダードであったのかもしれない。ちなみに、扉の上半分が開いている構造のトイレは江戸の特徴である。二戸連続の厠はなにも長屋のトイレや公衆トイレに限った話ではない。

文京区の大聖寺藩前田家上屋敷跡(東京大学本郷構内・医学部附属病院外来棟地点)から十数基のトイレ遺構が検出されている。これらは南北にほぼ一列に並んでおり、二つないし三つの穴がセットとなって配置されている。連続された厠の場所であり、なおかつ穴跡の位置から、上屋は二連棟ないし三連棟の厠であつたのだろう。さすがに、殿様や姫君の便器は平安時代から続く伝統

の「樋管」であつたようだが、屋敷端の厠は大奥に仕える女中などの奉公人が利用していた。

**ああ、やっつけてしまった!
トイレに物を落としたら**

この大聖寺藩前田家上屋敷跡のトイレ遺構は、SL79・SL80・SL347号の一列に並んだ穴跡から、紅筆の柄、銀製瑪瑙玉装簪、丸鬚用真鍮製筭、衿留めピン、温石、銀製金鍍金福良雀装簪等が

見つかった。これらの出土遺物から考えて、このトイレの場所は女性居住区にある女性専用トイレであつたことが考えられる。



筭・簪・衿留めピンの出土状況(SL80遺構)
東京大学埋蔵文化財調査室所蔵



(上)SL347遺構から出土した銀製金鍍金福良雀装簪
(下)SL80遺構から出土した筭・簪・衿留めピン
東京大学埋蔵文化財調査室所蔵

誰しも一度は、うっかりトイレに物を落としてしまった経験があるだろうが、現代も汲取り式トイレに物を落とした場合、回収はほぼ不可能である。お気に入りの簪や紅筆、お金の

どを落としてしまったら、拾うに拾えず悔しい思いをしたことだろう。

トイレを調べて分かること

女性に関するトイレ遺構では、隣接する加賀藩前田家上屋敷の梅之御殿でも興味深い分析結果が出ています。梅之御殿は、十代藩主前田重教正室寿光院のために十二代藩主斉広が新築し、続けて十一代藩主夫人が住んだ隠居所である。ここからトイレ遺構が検出され、二つのトイレ遺構の土壌を科学分析にかけた。その結果、「人足溜り」(男性行動圏)の近くにある便槽に対して、「部屋方」や「奥向き」(女性行動圏)の近くにある便槽から二〜三倍の鉛含有量が測定された。つまり、鉛は女性の排泄物に含まれていたと考えられる。この当時の鉛といえ、鉛白粉がすぐに思い出される。

肌へのつき・のびがよく安価な鉛白粉は、化粧をする女性には必要不可欠なものであつた。白粉は、顔から首にかけて、胸元から背中にかけてと広く塗る。そのため乳母や母親が塗っていた白粉を舂めて鉛中毒を起こしてしまふ子どもも多かつた。多量な鉛含有量を測定したトイレ遺構は、子どもだけでなく白粉化粧をしていた女性にも危険が及んでいたことを物語っている。

将軍や殿様は、樋管に用を足した後、樋管の下部を引き出し、医者が健康状態をチェックしていた。鳥浜貝塚の糞石、加賀藩前田家上屋敷跡の厠遺構といふ排泄物から情報を得られることは多い。大便は単なる排泄物ではない。われわれの健康状態を教えてくれる貴重な情報源なのだ。

※京阪では、糞代は家主、尿代は借家人の収入であった。

【講座のご案内】

紅ミュージアムでは、夏休みの自由研究のテーマにぴったりの体験講座を開催いたします。

■「紅ってなあに」

「紅の作りかた」・「紅を塗ってみよう」・「紅を食べてみよう」など、紅について楽しみながら学べる体験講座です。

2016年7月27日(水)・8月18日(木)
各日①10:30~12:00 ②14:30~16:00
講師:当館エデュケーター

■対象:小学3・4年生とその保護者
■定員:各回5組10名 ■参加費:無料

■「御料紅を使って和菓子を作ってみよう」

食紅(御料紅)を使って、紅染めの和菓子を作るワークショップです。1組3種類の和菓子を作ります。

2016年8月5日(金) 14:00~16:00
講師:池田功氏(御菓子司 一炉庵店主)

■対象:小学生とその保護者
■定員:15組30名 ■参加費:1,500円

講座はいずれも事前予約制(先着順)です。お申し込みは紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。

— 伊勢半グループ製品の



《ツートン口紅》

韓国コスメから火のついた、色落ちしにくく自然な発色をするティントリップ。唇の水分量やPh値に反応して色づく特性から新感覚リップと言われているが、実はこれ、昭和初期の日本にすでに存在していたリップコスメである。

かつて日本の口紅は猪口や皿を容器としていた。国産初のスティック形口紅「棒紅」が発売されるのは大正六年（一九一七）のこと。初期の棒紅はいまだ発展途上の過渡期にあり、赤色顔料（カーミン）を棒状に固めたにすぎない、クレヨンのような代物だった。

明治時代より日本の化粧品業界は、フランス、ドイツ、アメリカ等欧米諸国から最新の化粧品を輸入し、その製造技術のみならず質、形状、容器、デ

ザインなどを積極的に取り入れて成長していった。大正六年以降、棒紅は徐々に浸透し、改良もされていくが、その色数は外国製の口紅に及ばず、レッドやオレンジ、またはそれらに濃淡（ダーク、ライト）の違いがある程度のわずかな展開に留まっていた。ところが昭和初期に至ると（おそろく六〇七〇年頃と推定）、「ツートン」あるいは「ツートンカラー」と謳った口紅が見え始める。ツートンは造語で、本来は「two tone」、二種の色調を意味する。唇に塗布する以前と塗布後の発色が異なる、染料系の変色する口紅を「ツートン口紅」といったのである。一方、塗布前後で変色しない口紅を原色口紅という。

昭和七年（一九三二）月刊の『東京小間物化粧品名鑑』は、当時の化粧品類と製造者を収載する。そのひとつ、伊東胡蝶園（パピリオ前身）発売の「御園煉紅ツートンリップ」は、「つけた色が唇の温みによって朗らかな色合に変化」する口紅であった。この特性からも判明するよう、ツートンの変色作用は唇の温度や水分量、Ph値に反応して起こる。個人の唇の元来の状態を活かして色づくのである。時を置かずして伊勢半もツートン口紅の製造に着手していたよう。昭和九年度（一九三四）『伊勢半製品製造法』によれば、木蠟、固形パラフィン、ひまし油、染料（エオンシ）、香料を原料にしていた。

もともとは仏製や米製の輸入品であったツートンの口紅。原色だけでなく、ようやく国産の変色口紅を見るようになる昭和

和初期以降、その自然な発色が支持され、昭和四〇年代までツートンカラーは根強く存在し続ける。余談だが、戦後の婦人雑誌に、口紅の色落ち防止策としてツートン口紅を下地に原色口紅を塗ることを勧めるコラムがある。唇に染めつくツートンならではの利用法である。

※1「東京小間物化粧品商報」昭和七年一〇月一日発行号紙面広告文面より抜粋。
※2「婦人倶楽部」昭和二十四年二月号



昭和初期に伊勢半が製造したツートン口紅(左)と原色口紅(右)

【ご案内】
2016年7月23日(土)〜8月28日(日)開催期間限定ミニ展示「昭和初期の口紅」(仮)にて、右の資料を展示します。

かわら版

Information

新商品のご案内

伊勢半本店では、7月25日より「小町紅『手毬』」2種(各9,000円/税抜)を発売いたします。今回の新柄は、手毬らしい糸目を表した、華やかな「福てまり」と、深みのある青が美しい「瑠璃てまり」。大切な方へのプレゼントに、ご自身の特別な日に、彩りを添える一品です。



小町紅『手毬』福てまり、瑠璃てまり

震災のお見舞い
このたびの平成28年熊本地震によりに被害を受けられました皆様に、謹んでお見舞いを申し上げます。一日も早く復旧されますよう、心よりお祈り申し上げます。

Since 1825
伊勢半本店 ミュージアム
●開館時間/10:00~18:00 ●休館日/毎週月曜日
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
<http://www.isehanhonten.co.jp>